IS～織斑一夏に憑依！～

メテオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～織斑一夏に憑依！～

【Ｎコード】
Ｎ６７６５Ｚ

【作者名】
メテオ

【あらすじ】
書いてみました。ただ、僕自身文才がないので酷いできになると思いますが、暖かく見守ってください。よろしくお願いします
後篝が登場しませんので（個人的に好きではないので）ファース党の方回避を推薦します

第1話　プロローグ

画面の前の皆さん、こんにちは
僕は（一応）神です
ただ、まだ生まれたばかりで、年齢は１０歳です

「父さん、母さん。そろそろ下界に降りて（転生して）修行に行く場所を決めないと」

「ああ、そうだったな。場所はこの中から選んでくれ」

そういって出されたのは

・地球（普通の世界）

・ＩＳの世界

・バカテスの世界

・ガンダムの世界

・魔法少女リリカルなのはの世界

・ブリーチの世界

・ワンピースの世界

の7つでした

「どれにするか、じっくり考えろ」

「・・・・・・・・・・・・じゃあＩＳの世界で」

「分かった。次は設定とオプションだな」

そうです。転生するときはオプションをつけることが出来るんです。って僕誰に話してるんでしょう？

「え～っと・・・・・・あったあった」

【設定】

●転生先

・織斑一夏（憑依）　◎

って一つだけかい！

●ＩＳ

・白式

・百式

・Ｚガンダム　◎

【オプション】

●頭脳

・原作一夏

・篠ノ之束以上で完全記憶能力付き＋鈍感なし　◎

●所属

・無し

・日本代表候補生　◎

・中国代表候補生

・イギリス代表候補生

・ドイツ代表候補生

・フランス代表候補生
●アラスカ条約
・コアの開発禁止　無し　◎
設定・オプションの選択終了
「もうそろそろ行くか？」
「うん。もうそろそろ行くよ」
「「いってらっしゃい」」
「いってきます」

設定＊たまに変わってます（前書き）

たまに変更する場合がありますのでご注意ください

設定＊たまに変わってます

主人公

織斑　一夏＊神が憑依

性別　男

楯無より少し弱いぐらい

第５０１統合航空団ＩＳ分隊通称『ライトニング』指揮官

専用ＩＳ

Ｚガンダム

第４世代機

コア　日本（一夏）開発　ＧＮコア・魔道エンジン

準単一仕様能力

武装

ビームサーベルＸ４

ビームライフルＸ４

シールドＸ５

日本刀Ｘ２

Ｉフィールド

ファンネルＸ２０　量子通信型

スーパードグラーンＸ１５　量子通信型

超電磁砲Ｘ８　肩に２つ・腰に２つ　予備４個

ストライカーユニットＸ１０

生体反応認識装置

コア確認装置

ヒロイン

凰鈴音（ふぁん すずね）

楯無より少し弱いぐらい

原作との違い

日本国籍　日本代表候補生

専用ＩＳ

Ｚガンダム３号機

コア　日本（一夏）開発　ＧＮコア・魔道エンジン

武装

ビームサーベルＸ４

ビームライフルＸ４

シールドＸ５

Ｉフィールド

ファンネルＸ２０　量子通信型

スーパードグラーンＸ１５　量子通信型

超電磁砲Ｘ８　肩に２つ・腰に２つ　予備４個

高速撤退用装置　通称ストライカーユニットＸ１０

空気砲Ｘ２個

更識　簪

楯無より少し弱いぐらい

専用ＩＳ

Ｚガンダム２号機

コア　日本（一夏）開発　ＧＮコア・魔道エンジン

武装

ビームサーベルＸ４

ビームライフルＸ４

シールドＸ５

Ｉフィールド

ファンネルＸ２０　量子通信型

スーパードグラーンＸ１５　量子通信型

超電磁砲Ｘ８　肩に２つ・腰に２つ　予備４個

高速撤退用装置　通称ストライカーユニットＸ１０

山嵐　第３世代技術のマルチロックオン・システムによって６機×８門のミサイルポッドから最大４８発の独立稼動型誘導ミサイルを発射する

更識　楯無

日本代表

今の千冬と同じぐらいの強さ

専用ＩＳ

Ｚガンダム４号機　通称ミステリアス・レディ

コア　日本（一夏）開発　ＧＮコア・魔道エンジン

武装

ビームサーベルＸ４

ビームライフルＸ４

シールドＸ５

Ｉフィールド

ファンネルＸ２０　量子通信型

スーパードグラーンＸ１５　量子通信型

超電磁砲Ｘ８　肩に２つ・腰に２つ　予備４個

高速撤退用装置　通称ストライカーユニットＸ１０

ナノマシン

●用語（？）説明

準単一仕様能力

人工的に作り出した単一仕様能力の事。作るのは今のところ一夏しかできない

第2話

～夢～

「ねぇ、一夏。私が代表候補生になったら、毎日味噌汁を食べてくれる？／／／」

「え？ああ、いいよ／／」
ああ、この時のことははっきり覚えてるな
鈴音に告白されたときだったな／／

～ＩＳ学園～

「全員そろっていますねー。それじゃあＳＨＲはじめます」

「それでは皆さん。一年間よろしくお願いします」

「次、織斑君お願いします」

「あ、はい。織斑　一夏です。趣味は、鉄道の写真を撮ることと、ハッキ・・・じゃなかったＩＳの武装や機体の開発です。あ、後日本代表候補生で、そこに居る人外「バシュ」「ヒュ」織斑先生の弟です。ちなみに3年前ほどから動かせることが分かっていましたが、今まで機密事項指定されていました。よろしくお願いします」

「避けるな。織斑」

「嫌です」

「・・・まあいい。諸君、私が織斑　千冬だ。君たち新人を一年間で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ」

「私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ないものにはできるまで指導してやる。私の仕事は弱冠１５歳を１６歳までに育て上げることだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

「キャ――――――――――！！千冬様！本物の千冬様よ！」

「私、ずっとファンでした」

「私、お姉さまにあこがれてこの学園に着たんです！北九州から」

「あの千冬様にご指導いただけるなんてうれしいです！」

「私、お姉さまのためなら死ねます」

「・・・・・・毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

一夏・鈴音・簪「「「おそらく後者だと思います。というより信じたい」」」

「きゃあああああ！お姉さまもっと叱って。罵って！」

「でも時には優しくして」

「そして付け上がらないように躾をして」

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君にはＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、私の言葉には返事をしろ。よくなくても返事をしろ。何が何でも返事をしろ。いいな」

「ちょっとよろしくて？」

「ええ、構いません」

「イギリス代表候補生のセシリア・オルコットさんでしたよね」

「ええ、そうですわ。本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・幸運なのよ。その現実をもう少し理解してくださる？」

「いえ、僕の場合は男でＩＳを動かせるという特異性があるから代表候補生に選ばれたけど、オルコットさんのほかにも、鈴音や簪、それに元代表候補生の山田先生や元日本代表の織斑先生も居ますよ？」

「なッ」

「私は入試で教官を倒しましたのよ？それがあなたに出来て？」

「ええ、できますよ。鈴音も簪も倒しましたよ？もっとも全員手を抜かれていますがね」

キーンコーンカーンコーン

「それでは、この時間は実践でしようする各種装備の特性について説明する」

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出場するクラス代表者を決めないといけないな」

「クラス代表者とは、そのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や、委員会への出席・・・まあ、クラスの長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を図るものだ。今の時点でたいした差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

「はいっ織斑君を推薦します」

「私もそれがいいと思います」

「では、候補者は織斑一夏・・・他にいないか？自推他推は問わないぞ」

「待ってください！納得がいきませんわ！」

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを物目ずらしいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこ

のような島国までＩＳの技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭もございませんわ！」

「いいですか！クラス代表は実力トップがなるべき、そして、それは私ですわ」

「大体文化としても後進的な国で暮らさないといけないということ自体、私にとって耐え難い苦痛で――――――」

「織斑君なにやってるの？」

「この事をツイ〇ターにリークしようと思ってねｗ」

「送信っと」

「えーと何々？ＩＳの技術を日本から貰ってるくせに偉そうなこと言うな、イギリスは日本に戦争をしかけようとしているのか？、とか色々着てるな」

「多分オルコットのせいでイギリスの評価がかなり下がったかな？」

「織斑、授業中に何携帯をいじっている」

「ツイ〇ターにこの事をリークしていました」

「そうか」

さて、反撃開始っと

「実力トップがなるんだったら、俺か鈴音か箒の内のだれかだぞ？」

「な、なんですって」

「じゃあ、オルコットは織斑先生と戦って何秒持つことが出来る？」

「おそらく３０秒といったところですわ。普通の方なら１０秒もっていい方ですわね」

「俺たちなら３０分は持たせられるぞ？」

「な、何を言って」

「ちなみに現日本代表は引き分けか勝つぞ？」

「俺たちは現日本代表より少し弱いぐらいだしな」

「ついでに言うとツイ〇ターにリークしたら、結果としてこっちの援護のコメが大量に出てきたぞ。毎秒１００ぐらい」

「くっ決闘ですわ」

「別に構わんが？」

「行っておきますけど、わざと負けたりしたら私の小間使い――――いえ、奴隷にしますわよ」

「へーイギリスってまだ奴隷制度あったんだｗｗｗ文化レベル低いなｗｗ」

「あ、ハンデはどれくらいつければいい？」

「あら、早速お願いかしら」

「いや、俺がどのくらいつければいいのかと思ってなw」

「お、織斑君それ本気で行ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔のことだよ？」

「織斑君は確かにＩＳを使えるかもしれないけどそれは言いすぎよ」

「で、織斑先生、俺はどのくらいハンデをつければいいんですか？」

「そうだな。とりあえずはハンデなしでいい」

「分かりました。ノーダメージで勝てということですか分かりました」

「あ、織斑君まだ教室に残っていたんですね。良かったです」

「あ、山田先生なんですか？」

「えっとですね。寮の部屋が決まりました」

「ああ、そうですか。まあ、立場上仕方の無いことですからね」

「分かってくれてありがとうございます。これが部屋の鍵です」

「ありがとうございます」

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食には六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場も有ります。学年ごとに使える時間が違いますけど・・・・・・えっと織斑君は今のところ使えません」

「ええ、分かっています」

「じゃあ、私たちは会議があるので、これで。織斑君、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

「はー・・・・・・」

「えーと１０２５室、ここだな」

「誰か居るの？」

「ああ、同室になった人ね。これから一年よろしくね」

「こんな格好で「ちょっと鈴音まった。俺、一夏。服を着てからにして」

「え？一夏なの？分かったわ」

「にしても一夏と同室か。一夏がたのんだの？」

「うん、姉さんがここで働いてるって言うのは聞いてたから、鈴音と同室になるように頼んだんだ」

「そうなんだ」

「あ、そうだ一夏、あのときの約束覚えてる？」

「ああ、覚えてるぞ？「ねぇ、一夏。私が代表候補生になったら、毎日味噌汁を食べてくれる？」だったよな」

「覚えててくれたの！」

「うん・・・・・俺の好きな人に告白されたら忘れないって」

「じゃあ、私と付き合ってくれるの！？」

「うん。好きだよ、鈴音」

「私もよ」

第3話（前書き）

ストライクウィッチャーズ要素登場です

第3話

～昼休み～
「あ、ラーメンでよかったよな」
「うん」
「ねぇ、君って噂の子でしょ？」
「ええ、おそらくは」
「代表候補生の子と勝負するって聞いたけど、ほんと？」
「はい、そうですけど」
「でも、君素人だよね？ＩＳの稼働時間いくつくらい？」
「これでも一応代表候補生なので少なくとも３００時間ぐらいは」
「そ、そう」
「でも私が教えてあげようか？ＩＳについて」
「いえ、代表候補生二人と国家代表１人と一緒に訓練しているので問題ありません」
もちろん鈴音と簪と楯無だ
「そ、そう。それなら仕方ないわね」

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――

〜アリーナ〜

「じゃあ、鈴音行ってくる」

「ええ、あの雑魚を倒してきなさい」

「雑魚ってｗまあほんとなんだけどね」

「あら、逃げずにきましたのね」

「あなた程度に逃げる必要がありませんからね」

既に試合開始の鐘はなっている

「最後のチャンスをあげますわ」

「そのようなものはいらないな」

「な、なんですって！！」

ファンネル噴出

ファンネル操縦ＡＩに変更　攻撃開始

ドグラーン噴出

ドグラーンは防御に専念　ＡＩによる操縦に切り替え

「なっビットですって！」

「なら、私も本気を出しますわ」

レーザータイプのビットか
だが　Ｉフィールド展開

「なっビームを打ち消した！」

超電磁砲及びビームライフル展開
超電磁砲及びビームライフル　チャージ開始

エネルギーチャージ率７０・８０・９０・１００・１１０・１２０・１３０

フルバースト
ドカーン！！

『そこまで、勝者織斑一夏』

「一夏お疲れ～」

「いや、そこまで疲れてないよ。相手が弱・・・いや日本代表候補生が強いのか？」

「まあ、そうでしょうね。楯無さんより少し弱いぐらいだしね」

「あはは、そうだね・・・・・・・えと生徒会室行かないとやばくない？」

「・・・・・・えーと確か楯無さんだったよね、会長」

「じこくしたら・・・・・・どうなる？」

「アハハハハ・・・・・・・・・・・・・・・やばい」
「織斑先生、楯無さんから呼ばれてるので行ってきます」
「・・・ああ、分かった」

～生徒会室～

「はぁ～何とか間に合った」
「チッ・・・・・・あと１０秒だったのに」
「あぶなッ」
「まぁ～はじめるよ～」
「って本音何をやってるんだ！」
「何って～モン〇ンのＷｉｋｉの更新ちゅーなのだー」
「今やることじゃないだろ！」
「全国３５００万人もの人が私の更新をまっているからやらないといけないのらー。私が更新しないとだれが更新するの～」
「そんなの誰かがやるから！」
「全国３５００万もの人がこまるのらー」

「はぁ・・・分かった」

「ふふふ、じゃあ書類整理からはじめるわよー」

「あいあい」

「えーと剣道部からか『竹刀に鉄をつけることの許可を下さい』ってダメーつけたら真剣になるー、アウト。次は『けいおん！をリアルでやりたいからカスタネットの大量配備』うんたんでもやるつもりかい！まあ、許可っと。次は軍からね『ネウロイが出現、ＩＳからの支援攻撃求む』ってオイここに回さずに上層部にまわせやコラ！！。ふぅー終わった」

「ねぇ、何かやらない？」

「そうですね。校内放送でアニメを作ればいいのでは？」

「いいわね、それ。じゃあ、ＩＳ学園校内インターネットアニメやるわよ！」

「それじゃあどんなアニメにする？」

「そうだー部屋の中で成立するあにめつくろーよー」

「それはダメ！日曜夕方にしか生息してない」

「やっぱ数字取るにはやっぱアクションでしょ。ついでに７つ集めるとなんでも願いが叶うっていうアニメにしようよ」

「それもダメ！」

「それよりもまず、アニメのタイトルを決めよう」

「ひらがなにしようよ。それで真ん中に☆とか」

「☆かい！」

「じゃあついでに星の入った玉を7つ集める話にしようよ」

「仕方ない。ならいっそのこと新しいタイトルを涼宮・・・ゆうう つってどうやって書くんだっけ」

「書いちゃダメだから」

「書いとけばみんな見てくれるでしょ」

「「犯罪でしょ」」

「まあ、とりあえず備品購入申請書きてるからそれ済まそうよ」

「えーとサッカー部からね」

「サッカー部あるんかい！」

「空を飛ぶ？の翼ＯＫ」

「リアルキャプテン翼でもやるつもりかい！確かにＰＩＣの応用で出来るけどさ！」

「軽音楽部、カスタネットＯＫ」

「さあ、今日はこれで終わりよ」

「「「乙」」」

～セシリア～

今日の試合

同じ代表候補生なのにこうも簡単に負けてしまうなんて・・・・・・

織斑　一夏・・・・・・

なんだろう、この気持ちは

知りたい

知りたい。一夏のことを

～翌朝～

「では、一年一組代表はセシリア・オルコットさんに決定です」

「先生、なぜでしょう。本来なら勝った”一夏”さんになるはずですが」

「ああ、それはですね、織斑君が生徒会の仕事で忙しいから出来ないと理由で断ったんです」

《鈴音、まさかフラグたった・・・・・・・・・・・・のか・・・・・・？》

《い、一夏ねぇ！！！何フラグ立ててるのよ！》

《ごめんな、でも、ただ圧勝しただけだぜ？なんでそうなるんだ？》

《言われてみればそうね。どうしてなのかしら》

《まあ、俺には関係ないけどな。鈴音がいるから》

《そうよね♪良かった》

「それでですね。一夏さんの訓練に私も入れていただけませんこと？」

「残念だけど、それは無理だ」

「な、どうしてですの？」

「一部機密事項が入っているからあまり見せられないからだ」

「そうですの・・・・・・」

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、凰、更識、ためしに飛んでみろ」

Ｚガンダム展開

補助ブーストＯＮ

「織斑、補助ブーストをつけると見えないから補助ブーストはいらん」

「了解」補助ブーストＯＦ

「よし、飛べ」

ドォォォォン

「は、早い」

「でもそれに比べてオルコットさん遅くない？」

「いや、織斑君たちが早すぎるんだよ」

「オルコット、織斑、凰、更識、急降下と完全停止をやって見せろ。オルコットの目標は１０ｃｍ。織斑、凰、更識の目標は１ｃｍだ。日本代表候補生のトップならこの程度できるだろう」

「「「「了解」」」」

「じゃあ、先に逝くわ」

「わかった」

ギュイン――――――――――

１？か

「では次は私が」

１０？ちょうどですわ

「次は私が行くね」

０．９？かぁ

「最後は私」

０．５？か

「織斑、武装を展開しろ」

「はい」

右手にビームライフル

左手にビームサーベル

超電磁砲を４つ展開

「０．４秒か。まずまずだな」

「次オルコット」

「はい」

「そのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれは私のイメージをまとめる為に必要な――――」

「直せ。いいな」

「―――、・・・・・・はい」

「オルコット、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はい、はいっ」

「くっ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まだか？」

「す、すぐです。――――――――――――ああ、もう『インターセプター』！」

「・・・・・・・・何秒かかっている。お前は実践でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実践では近接の間合いに入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。代表候補生といえど織斑に簡単に懐を許されそうだっただろ。もっとも射撃だけで堕ちたがな」

「あ、あれは、その・・・・・・・・」

《あなたのせいですわよ》

《責任転換するな》

「次、凰。織斑と同じ武装を展開しろ」

「はい」

「０．４５秒なかなかだな」

「次、更識。織斑と同じ武装を展開しろ」

「はい」

「０．４秒。なかなかだな」

「時間だ。今日の授業はここまｄ」

ウーーーーーーー

「第２種警戒態勢！」

『未確認飛行生物、通称ネウロイが出現。専用機持ち及び教員は迎撃してください。繰り返します。ネウロイが出現。専用機持ち及び教員は迎撃してください。』

「鈴音、簪行くよ。全リミッター解除」

「了解！」

「久しぶりの実戦」

「遅れてゴメンね♪」

『こちら第５０１統合戦闘航空団です。増援に来ました』

『ありがとうございます。現在こちらの戦力は専用機４機と訓練機１０機ほどです。もうすぐ他の専用機持ちも来ると思います』

『了解しました』

『こちら（学園側）で囮をしますので、迎撃はお願いします』

『了解しました』

『全機オールレンジ攻撃ＡＩ用意』

『『『了解』』』

『『『『オールレンジ攻撃開始』』』』

『攻撃開始！』

『了解』

『敵、撃破を確認。ミッションコンプリート』

『援軍にきていただいてありがとうございます』

『いえ、我々は当然のことをしたまでです。では我々はこれで』

『はい。分かりました』

～ネウロイ戦　一般生徒視点～

「うわ～ネウロイか。まあウィッチと専用機持ちが居るから大丈夫なんだろうけど」

「うわ～流石に第５０１統合戦闘航空団は強いね～」

「え？第５０１統合戦闘航空団ってあの？」

「そうよ。第５０１統合戦闘航空団。通称ストライクウィッチャーズ。しかもウィッチだけではなくＩＳもある。その中でも最強のＩＳ操縦者は凰鈴音・更識簪・更識楯無。それにあと一人・・・おそらく織斑一夏を加えた４人が最強のＩＳ操縦者よ」

第４話

クラス対抗戦・・・各クラス代表によるトーナメントの事

ちなみに生徒会役員は管制室にいる

「さあ踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でるワルツで」

そう言いながらセシリアはビットを出す

そして、相手のエネルギーを零にしようとした瞬間何者かが突如アリーナに侵入してきた

ズドォォォォォン

「織斑先生、出撃許可を」

「無理だ。遮断シールドがレベル４に設定され扉もすべてロックされている。今山田先生が解除をしているが時間がかかる」

「ッ！？俺がやります。山田先生どいてください」

「え！？あ、はい」

カタカタカタカタ

「ハッキング成功。扉のロックを解除。続けてピットのシールドを解除」

「織斑先生、解除しましたので出撃許可を」

「許可する」

「了解」

「鈴音、簪、楯無。行くぞ」

「「ええ」」「うん」

「ストライクウィッチャーズ出撃する」

「全員退避して。足手まといになる」

「なっそ、そんなこと」「ある。最低でも最高第1宇宙速度ぐらいだせなければ話にならん」

「・・・・・・・・・わかりましたわ」

《鈴音は衝撃砲で相手をけん制。簪はオールレンジで攻撃しながら状況を見て山嵐で攻撃。楯無は蒼流旋で攻撃。時折の超電磁砲も忘れずに。最後は敵ＩＳを回収する。最強の部隊、ストライクウィッチャーズの力を見せてやれ》

《《《了解》》》

《《《《散開》》》》

「全機攻撃態勢に移れ。目標、所属不明ＩＳ！」

「「「了解」」」

「これでも喰らっときなさい」

そういいながら鈴音は衝撃砲で相手をフルボッコに

「全方位からのオールレンジ攻撃、避けられる？」

「ナノマシンの力、見せてあげるわ」

「生体反応・・・・・・無し」

《みんな。あれは無人機みたいだから作戦変更する。オールレンジ攻撃で撃破する》

《《《了解》》》

《《《ビット噴出》》》

《敵ＩＳへの命中を確認。繰り返し射撃せよ》

《《《了解》》》

《敵ＩＳの沈黙を確認。加えて回収完了》

《《《《ミッションコンプリート》》》》

「ふぅ。お疲れさん」

「いや、疲れて無いでしょ」

「まあそうだけどね。とりあえず織斑先生への報告済ませないと」

「そうだよね～」

「織斑先生。織斑です」

「ああ」

「ミッションは無事完了しました。回収したＩＳは既に引渡しを完了。多分解析中だと思います」

「分かった」

～隠された空間～

「織斑先生、あのＩＳの解析結果がでましたよ？」

「ああ、どうだった？」

「ええ、織斑君が生体反応識別装置で確認した通り無人機でした」

「どのような方法で動いていたかは不明です」

「コアはどうだった？」

「それが・・・・・・登録されて無い通常コアでした」

「そうか」

「何か心当たりがあるんですか？」

「いや、ない。今はまだ――――な」

第5話

～六月頭　五反田食堂　２階　弾の部屋～

「で？」

「で？って、何がだよ」

「だから、女の園の話だよ。いい思いしてるんだろ？」

「してねぇよ。俺には鈴音がいるしなｗ」

「え？お前たちって付き合ってたっけ」

「付き合ってるよｗてか前に付き合うことになったってメールしただろ！」

「・・・そういえばそうだったな」

「それに俺は休日なんてほとんど無いぜ？だって休日は第５０１統合航空団への報告書を書かないといけないし、ストライカーユニットの訓練もしないといけないし、新しいコアの開発もしないといけないし、大変だぞ？俺は」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「お兄！さっきからお昼できたっていってんじゃん！さっさと食べに来なさ――――――――――」

「あ、久しぶり。邪魔してる」

「久しぶりですね。ＩＳ学園に通ってるって聞いてましたけど」

「うん。まあね」

「蘭、お前なあ、ノックくらいしろよ。恥知らずな女だと思われ―――」

「あ、一夏さんも良かったらお昼どうぞ。まだ、ですよね？」

「うん。いただくよ、ありがとう」

「いえ」

「とりあえず飯食ってから街にでも出かけるか」

「ああ、そうだな。昼食ゴチになるわ。サンキュ」

「気にするな。どうせ売れ残った定食だろうから」

「じゃ。ま、行こうぜ」

「うげ」

「ん？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なに？何か問題でもあるの？あるならお兄ひとりで外で食べてもいいよ」

「聞いたか一夏。今の優しさにあふれた言葉。泣けてきちまうぜ」

「てか今たってたら他のお客さんに迷惑かかるだろうからさっさと座ろうぜ」

「そうよ馬鹿兄貴。さっさと座れ」

「へいへい」

「食わなきゃ下げるぞガキども」

「く、食います食います」

「「「いただきます」」」・・・・・・」

「おう、食え」

「あ、そうだ。私来年ＩＳ学園受験することにしたんです」

「へぇそうなんだ」

「そういえば簡易適正試験受けた？」

「ええ、判定Ａ＋でした」

「Ａ＋か。なら代表候補生になった方がいいぞ。推薦しておこうか

？」

「え、いいんですか？」

「うん。最近はＢぐらいしか見つからないからね」

「ありがとうございます」

「じゃ、一夏エアホッケーで勝負な」

「はぁ、本気だしてやろうか？」

「ふん。俺を中学生のときのままだと思うなよ」

「雑魚がいい気になるな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・１５０対０・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一夏、お前なんでそんなに強いんだよ」

「反射神経と動体視力が高いからに決まってるだろ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・公式チートが」

～ＩＳ学園　１－１　教室～

「やっぱりハヅキ社製のがいいなぁ」

「え？そう？ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイ社のがいいなぁ。特にスムーズモデル」

「あーあれね。物はいいけど、高いじゃん」

「そういえば織斑君のってどこのやつなの？見たことないけど」

「第５０１統合航空団製だけど？」

「・・・・・・・・・・・・・・」

（あそこＩＳスーツも作ってるのかよ）

クラスほぼ全員の意見が一致した瞬間であった

「ＩＳスーツは肌表面の微弱な電位差を検地することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ＩＳはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に動きを受け止めることができます。あ、衝撃はきえませんのであしからず」

「山ちゃん詳しい」

「一応先生ですから・・・・・・・・・・・・って山ちゃん！？」

「山ピー見直した」

「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん。・・・・・・・・・って山ピー！？」

「あのー、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと・・・・・」

「えーいいじゃんいいじゃん」

「まーやんはまじめっこだなぁ」

「ま、まーやんって・・・・・・・・・・・・・」

「あれ？マヤマヤの方がよかった？マヤマヤ」

「そ、それもちょっと」

「じゃあ前のマヤマに戻す？」

「あれだけはやめてください！！」

「と、とにかくですね、ちゃんと先生をつけてください。わかりましたか？わかりますたね？」

クラス全員「はーい」

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます」

「では山田君、ＨＲを」

「は、はいっ」

「え、えっとですね。今日は転校生を紹介します！しかも2名です！」

「え・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「「「えええええええええええええええええっ！？」

「失礼します」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、よろしくおねがいします」

「お、男・・・・・・・・・・・・？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

《鈴音、簪、すぐに耳を閉じて》

《《わかってる》》

「きゃ」

「はい？」

「きゃああああああああああああああああ――――――――っ！」

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった～～～～～～～～～～～～」

「あー騒ぐな。静かにしろ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。もう教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生とよべ」

「了解しました」

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ、あの・・・以上・・・ですか？」

「以上だ」

「！ここにはストライクウィッチーズもいるのか」ボソ

「では、ホームルームを終わる。各人はすぐに着替えて第２グラウンドに集合。今日はＩＳ模擬戦を行う。解散」

「おい織斑、デュノアの面倒をみてやれ。同じ男子だろう」

「わかりました」

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびに移動だから早めに慣れてくれ」

「う、うん」

「とばすからつかまって」

「え？」

「いた！転校生よ」

「しかも織斑君と一緒」

「飛ばすぞ」
ドォン

「え？あれ？これって音速こえてるよね」

「そうだけど？」

「まあ、俺は織斑一夏。一夏で構わないよ」

「うん。よろしく一夏。僕のこともシャルルでいいよ」

「わかった、シャルル」

「間に合ったか？」

「あと３０秒ほどでチャイムがなる。列に並べ」

「「はい

」」

《鈴音、簪、多分シャルルは女だ。骨格も女と同じ作りになっている》

《分かった。今日の放課後、デュノア社に対してハッキングするわよ》

《《了解》》

「では本日より格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

「今日は戦闘を実演してもらおう。そうだな。オルコットと更識で

いいか」

「このようなことは見世物のようで嫌ですわね」

「即効で終わらせる」

「まあまて、相手は・・・・・・・・・・・・・・・」

キィィィィィィン

ドカーーーン

「あ・・・・・・・・・山田先生が落ちた」

「えーと、織斑先生、山田先生気絶してますよ?」

「・・・・・・仕方ない、織斑、相手をしろ」

「分かりました」

戦闘シーンはご想像にお任せします

「やっぱり一夏さんにはかないませんわ」

「流石に一夏は強いなぁ・・・」

「織斑君一緒にがんばろう～！」

「わかんないとこ教えて～」

「デュノア君の操縦技術を見たいな～」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループに入れて！」

「この馬鹿どもが・・・・・・・。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言ったとおり。次にもたつくようなことがあれば今日はＩＳを背負ってグラウンド１００週させるからな」

「最初からそうしろ。馬鹿どもが」

「・・・・・・やったぁ。織斑君と同じ班っ。苗字のおかげねっ・・・」

「うーんセシリアかぁ・・・・・・。さっき一瞬で倒されたしなぁ」

「凰さん、よろしくね」

「デュノア君！分からないところがあったらなんでも聞いてね！ちなみに私はフリーだよ！・・・・・・・・・・・・」

「では、午前の実習はここまでにする。午後は今日使った訓練機の

整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自分の機体の両方をみるように。では解散！」

～放課後～

「じゃあ、二人とも手伝ってね。簪の場所はフランス政府の戸籍情報『シャルル・デュノア』もしくはシャルルの女名の『シャルロット・デュノア』だ」

「俺と鈴音はデュノア社。これでいい？」

「「うん」」

「うわ～でてきた出てきた。本名シャルロット・デュノア。男でＩＳを動かせる世界唯一の男織斑一夏の情報をとるために男装させてＩＳ学園に入学させる」

「こっちもでてきた。シャルル・デュノア。デュノア社長（名称？そんなの無い）の養子」

「アタシのほうもでてきたよ。要約すると愛人の子で親が死に、デュノア社長の養子になり、強制的に男装させてＩＳ学園に入学させた・・・と」

「じゃあ、日本政府及び国際連合、第５０１統合航空団に報告」

「「了解」」

クリスマススペシャル！？（？）

ＩＳ～織斑一夏に憑依～クリスマススペシャル（名目上）

一夏と鈴音のデート

～冬休み～

「鈴音、今日遊園地に行かない？」

「え？デート？いいわよ♪」

～遊園地～

「一夏、何から乗る？」

「どうする？」

「ジェットコースターから乗りましょ♪」

「おＫ」

？・？・？ＧＯ

ゴゴゴゴゴゴゴ・・・ヒューーーーーン

うぇ・・・気分悪い

「うぅ・・・・・・ＩＳとは違った怖さが・・・・・・」

「Ｇが・・・・・・・うぅ・・・ＩＳとは別の怖さが・・」

「つ、次はメリーカップに乗りましょ♪」

「復活早ッ。まあ、乗るか」

「うん♪」

「さて、メリーカップに乗ったことを後悔するんだな」ニタァ

「え？ちょまっギャーーーーーーーー」

フフフフメリーカップを秒速2回の速度で回してやるよ。もっともGCは（Gキャンセラー）つけてるけどな

「うぅ・・・・・・酷い目にあったわ」

「ゴメンって・・・な？」

「まあいいわよ。許してあげる」

「で、次どこいくの？」

「お化け屋敷でも行くか？」

「それいいわね」

～お化け屋敷～

「きゃっい、一夏ぁ怖いよぉ～」ブルブル

って鈴音なにだきついてるんだよ。可愛すぎるだろ

「大丈夫だって。俺がついてるから」

「う、うん／／／」
「きゃっ」
といいながら一夏につかまる
～外～
「一夏ぁ。怖かったよ～」
「でも大丈夫だっただろ？」
「まあね」
～ＩＳ学園校門まで５００ｍ～
「あ、そうだ鈴音、ひとつ言い忘れてたことがあるんだ」
「私もよ」
「じゃあ、同時に言いましょ」
「いいね。それ」
「いっせーのーで」
「「メリークリスマス」」
～お　ま　け～
～血のクリスマス（クリスマス関係ないｗｗ）～もしもバカとテス

トと召還獣の世界だったら
「鈴音、好きだよ」
「私もよ。一夏」

『『『『異端者を殺せ！　世界の理と真理に反するものには清純なる正義の鉄槌を！！全ては清く清浄なる世界のために』』』』

『諸君！　ここはどこだ！？』
『『『『最後の審判を下す法廷だ！！』』』』
『異端者には！？』
『『『『死の鉄槌を！！！』』』』
『よろしい！ならば全員かかれ～！！！！！！！！！！！！』
『『『『『おおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』』』』』』』
「ふん。甘い」
「甘いわね～その程度で私たちを倒せるとでも？」
この程度。虚刀流　木蓮・さらに七花八裂改

完全鎮圧完了

『『『『『『『『『『ぐぁ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・グハ』』』』』』』』』』
「おーさすが一夏ね。虚刀流だけで倒すなんて」
「雑魚だしなｗｗｗ」

第6話

「すみません、織斑君いますか？」

「あ、はい。います。なんですか？」

「今月下旬から大浴場が使用可能になるので、伝えにきました」

「ありがとうございます」

「「あ」」

「奇遇ね。あたしはこれから学年別トーナメントに向けて個人特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。私もまったく同じですわ」

「ちょうどいい機会だし、模擬戦しない？」

「いいですわね」

「では――――」

「「！？」」

「ラウラ・ボーデヴィッヒ・・・・・・」

「どういうつもり？いきなりぶっ放つなんていい度胸してるじゃない。黒ウサギさん」

「黒ウサギ？なんですの？それ」

「ボーデヴィッヒが所属しているドイツ軍特殊部隊。もっとも私たちストライクウィッチャーズよりかは全然弱いけどね」

「そうなんですの」

「何？やるの？わざわざドイツくんだりからやってきてぼこられたいなんて大したマゾっぷりね。それともジャガイモ牧場じゃそういうのがはやってるの？」

「あらあら、鈴音さん。こちらの方はどうも語原をお持ちで無いようですから、余りいじめるのはかわいそうですわよ？犬だってワンといいますのに」

「はっ・・・・・・・・。技術だけがとりえの国と古いだけがとりえの国はよっぽど人材が不足しているらしいな。それにストライクウィッチャーズも実際は大したこと無いんだろう」

「セシリア、ごめん。あいつ、私一人で殺らせてくれない？私だけならともかく隊長たちを馬鹿にしたらついうっかりリミッター解除してセシリアまで殺しちゃいそうだから」

「・・・・・・・わかりましたわ」

「さぁ、いらっしゃい」

「鈴音ストップ。これ以上やるとアリーナがめちゃくちゃになるよ。それにあの部隊は雑魚なんだからわざわざ手を汚す必要なんてないよ」

「言われて見ればそれもそうね。一夏の2番機ともあろうものが取り乱してたわ。ごめんね」

「わかればいいんだって」

「鈴音、今度の学年別トーナメント一緒に組まない？」

「いいわよ」

「ありがとう」

「じゃあ、終わったらシャルルのところ行くよ」

「ああ、今日だっけ」

「そうだよ」

「分かった」

「シャルル、ちょっと話があるんだけどいい？」

「うん、いいよ」

ガチャ

「シャルル、いや、シャルロット。今ほんとのことを話したてくれたら第５０１統合航空団で保護できるんだけど、どうする？」

「え？シャルロット？僕はシャルルだよ？」

「誤魔化しても無駄だぞ？デュノア社にハッキング仕掛けて裏づけとって上に報告してあるから」

「・・・・・そうなんだ。分かった話すよ」

めんどくさいので（オイ）要約します

『お父さん・・・社長の命令で男装して第3世代のデータと一夏のデータを取ってくるように言われた。拒否権は無し』

「ありがと。これで完全に証拠はそろった」

「じゃあ、楯無、上への報告は頼む」

「わかったわ」

～翌日～

「えー今日は転校性（誤字じゃないですよ）を紹介します。転校生といいますか、既に紹介は済んでいるといいますか、ええと・・・・

・・・・・・」

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

「え？デュノア君って女・・・・・・？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったのね！？」

～6月最終週　学年別トーナメント当日　Aハッチ～

「はぁ、やっぱり着てるよな。みんな」

「でしょうね。まあちゃんと量子変換でユニットとか一式持ってきてるから何かあっても大丈夫でしょ」

「だよね」

「あ、やっぱりいるね」

「そうね～来てるのはシャーロットさんとルッキーニとペリーヌに利ネット、坂本さんに芳佳にミーナさんにバルクホルンさんにハルトマンさんにエイラにサーニャになのは・・・って全員いるんかい！」

「いや、鈴音突っ込まなくてもw」

「それもそうねw」

「これ、絶対負けられないよね。というか笑われるね」

「負けたら笑われるよね～」

「「絶対に」」

「「はぁ・・・・・・」」

『まもなく、学年別トーナメント一年の部、Aブロック一回戦を開始します。選手の方はアリーナ内に入ってください』

「鈴音、先にいくよ」

「分かった」

「織斑一夏　Zガンダム　出る」

「凰鈴音　Zガンダム3号機　行くわよ」

『ただいまより、Aブロック一回戦。織斑一夏&凰鈴音vsラウラ・ボーデヴィッヒ&シャルロット・デュノアの試合をはじめます』

《鈴音、まずはシャルロットを頼む。2分以内で倒してくれ》

《了解っと危ない危ない》

《危なくないくせに言うな》

～鈴音～

「さて、シャルロット、手加減はしないわよ？」

「手加減はいらないよ」

「ふふふ。さてと、超電磁砲展開っと」

「え！？いきなり！？・・・アハハハハハハ」

「超電磁砲発射～」

ドカーン

「うわぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・」

「うし！シールドエネルギー零確認っと」

《一夏、援護するわよ》

～一夏～

「お、鈴音来たか」

「叩き潰す」←ラウラです

「無理だなw」
オールレンジフルオープン
日本刀展開
準単一仕様能力　トランザム発動
ビュン
「シールドエネルギー零を確認・・・・・・ふぅ。終わっ・・・・・・」
DamageLevel・・・D.
MindCondition・・・Uplift.
Certification・・・Clear.
《ValkyrieTraceSystem》・・・boot.

「なあ、鈴音、あれって・・・・・・・」
「ええ、暮桜よね」
「正確には暮桜のコピー・・・・・・・VTシステムか」
「さてと、コア特定・・・・・・コア発見。コア抽出開始・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・コア抽出完了。暴走ISの暴走停止を確認。ミッションコンプリート」
「楯無さんにまた報告書任せる？」

「頼んでみましょうか・・・・・・」

「ってことで楯無さんお願いできませんか？」

「うーん。まあ仕方ないわね。やっといてあげるわよ」

扇子には『任せなさい』と書いてあった　まる

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6765z/

IS〜織斑一夏に憑依！〜

2011年12月25日18時57分発行